

東武野田線・大宮公園駅

寿能城 (さいたま市)

東武野田線（いまやアーバンパークラインというらしい）の大宮公園駅近くの埼玉県立歴史と民俗の博物館で「戦国図鑑」が開催されていました。若い女性グループが甲冑や刀剣の前で熱心に談笑されていました。ゲーム人気もあなごれません。

博物館のある大宮公園の東側に「寿能町」があります。今では住宅団地となった寿能町の台地の上には、かつて寿能城という中世城郭がありました。団地の一角にある寿能交番の前に大きな石碑が建っています（写真1）。だいたいまえになります。何かの本でこの石碑の写真が紹介されていました。寿能城跡には遺構らしいものがなく、石碑1本程度しかないのだろうと想像していました。『日本城郭全集4』（人物往来社、1967）でも遺構らしいものは潮田資忠の「供養塔のある櫓台のみ」としながらも、城の範囲を東西800m、南北400mとしていますので、執筆者の手元には城域がわかる資料はあったのでしょうか。そのことも気になっていました。その後『寿能城と戦国時代の宮』（大宮市立博物館、1990）でも、城そのものに限って言えば『日本城郭全集』の域を出るものではありませんでした。

『寿能城と戦国時代の宮』によれば、寿能城は永禄3（1560）年頃に築かれ、城主は潮田資忠だったとされます。資忠は岩付城主太田資正と潮田常陸介の娘との間に生れた子で、資正にとっては四男にあたるとのこと。太田氏は、河越城を橋頭堡に武蔵国に勢力を拡張してきた後北条氏に対抗していました。入間郡と足立郡の境目あたりが両勢力の前線になったと考えられます。潮田氏は足立郡の北部（桶川市あたり）に勢力を有していた一族で、太田氏はそうした家と婚姻関係を結びつつ、配下にしていきました。そうして、所領をもととの本領とは離れた浦和宿、大宮、木崎、領家などに宛行い、そのエリアに城を構えたとなると、本城である岩付城を守るために配置されたことが推測できます（西野博道『続・埼玉の城址30選』埼玉新聞社、2008）。そこで寿能城付近の地理を概観してみます。

入間郡から足立郡へ通じる羽根倉街道は、大宮の南あたりで東西に抜け、氷川社の東側を北上すると想定されており（『戦国時代のさいたま』さいたま市立博物館、2005）、そうだとすれば寿能はそのルート上にのるので岩付城の防衛線となりうる位置です（中田正光氏は『埼玉の古城址』有峰書店新社、1973で、寿能城-大和田陣屋跡-岩付城とを結ぶ軍用道があったとする）。

そして、氷川神社の存在も無視できないでしょう。大宮の町は近世中仙道の宿場に由来しますが、その名が示すように氷川社の門前町としての機能も古くからあったことは間違いありません。北条氏康が岩付城と寿能城を攻めたとき、氷川社の東角井氏とその神人が農民を動員して太田氏に加勢したという謂れもあります（「東角井家従五位物部福臣家系」『戦国時代のさいたま』所収）。城地選定にあたり氷川社や大宮に近いことも考慮されたのでしょうか。

城は、見沼（みぬま）という大きな湖沼を望む台地上に立地しま



写真1



写真2

す。見沼は「御沼」で、氷川社の信仰に関連しています。沼畔には氷川社のほかに、氷川女体神社、中川神社の3社が存在し、この3社で氷川社を構成していたとされています。これらがほぼ一直線上に並ぶことから宗像信仰にみられるような海人的な集団のネットワークが、見沼を核にできていたと考えられています（野尻靖「見沼と氷川女体神社」『見沼』さきたま出版会、2000所収）。そんな古い時代にまで遡らせるまでもなく、湖沼を介した内陸水路も寿能城の立地に影響したことでしょう。寿能城を「寿能の浮城」と表現していたこと（前掲『続・埼玉の城址30選』）が象徴的です。

現況では「本丸跡」と称される場所に潮田資忠の供養塔が建てられ（写真3）、その場所が物見塚だったとされています。ただし、下の空撮写真でわかるように、戦時中は一帯が高射砲陣地だったため、地形がかなり改変されたはず。そしてもう一箇所、城跡とされるのが台地の東南側にある「出丸跡」と称される場所です。見沼に突き出た舌状台地の末端を利用しています。その台地と出丸との間には見沼代用水西縁（みぬま代いすいにしべり）が流れています。これが堀切のようにもみえますが、18世紀に見沼を干拓する際に開削された水路です。

現在、この出丸跡だけが住宅地となっています（写真2）。わざわざ調整池に張り出すように宅地ができてるのがなんとも特異的です。その南東端には住宅も建たず雑木林が残っていて、土塁跡とされています。しかし現況ではよくわかりませんでした。



写真3



寿能城跡空撮写真（国土地理院 USA-M68-A-6-1-144, 1947 上が北）

×：写真1の場所 ○：本丸跡